



3/17 3/23 3/24 3/26 3/31

Eliahu INBAL

Conductor Laureate

エリアフ・インバル

桂冠指揮者

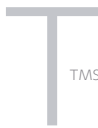
© 堀田力丸

1936年イスラエル生まれ。これまでフランクフルト放送響（現hr響）首席指揮者（現名誉指揮者）、ベルリン・コンツェルトハウス管首席指揮者、フェニーチェ劇場（ヴェネツィア）音楽監督、チェコ・フィル首席指揮者などを歴任。

都響には1991年に初登壇、特別客演指揮者（1995～2000年）、プリンシパル・コンダクター（2008～14年）を務め、2回にわたるマーラー・ツィクルスを大成功に導いたほか、数多くのライヴCDが絶賛を博している。『ショスタコーヴィチ：交響曲第4番』でレコード・アカデミー賞〈交響曲部門〉、『新マーラー・ツィクルス』で同賞〈特別部門：特別賞〉を受賞した。仏独政府およびフランクフルト市とウィーン市から叙勲を受けている。渡邊暁雄音楽基金特別賞（2018年度）受賞。

2014年4月より都響桂冠指揮者。マーラーの交響曲第10番や《大地の歌》、バーンスタインの交響曲第3番《カディッシュ》、ショスタコーヴィチの交響曲第7番《レニングラード》・第8番などの大作で精力的な演奏を繰り広げ、話題を呼んでいる。

Eliahu Inbal was born in Israel in 1936. He held numerous chief posts with orchestras such as Frankfurt Radio Symphony (hr-Sinfonieorchester), Konzerthausorchester Berlin, Teatro la Fenice di Venezia, and Czech Philharmonic. He was appointed Conductor Laureate of Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra in 2014. Many CDs of live performances by Inbal and TMSO are winning great acclaim. He was decorated by French and German Government, and by the cities of Frankfurt and Wien.



都響スペシャル

TMSO Special

TMSO

サントリーホール

2019年3月17日(日) 14:00開演

Sun. 17 March 2019, 14:00 at Suntory Hall

指揮 ● エリアフ・インバル Eliahu INBAL, Conductor

コンサートマスター ● 山本友重 YAMAMOTO Tomoshige, Concertmaster

ブルックナー：交響曲第8番 八短調 WAB108

(ノヴァーク：第2稿・1890年版) (80分)

Bruckner: Symphony No.8 in C minor, WAB108 (Nowak: 1890 version)

- I Allegro moderato
- II Scherzo: Allegro moderato
- III Adagio: Feierlich langsam, doch nicht schleppend
- IV Finale: Feierlich, nicht schnell

本公演に休憩はございません。

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

演奏時間は予定の時間です。

ブルックナー： 交響曲第8番 八短調 WAB108 (ノヴァーク：第2稿・1890年版)

アントン・ブルックナー（1824～96）の後期の交響曲は、それまで彼が究めてきた独自の交響曲様式と書法とが新たな円熟の境地を見出して、超越的ともいえる精神の高みを築いている。彼にとって完成された最後の交響曲となった第8番はそうした後期の特質を如実に示す傑作で、規模の大きさの点でも彼の交響曲の中で最大のものとなっている。

もっともこの作品が世に出るまでには紆余曲折があった。ブルックナーが自作の改訂を頻繁に行い、そのため彼の交響曲の多くが稿（ヴァージョン）の成立事情やそこから作られる版（エディション）のあり方の点で複雑な問題を抱えるようになったことはよく知られているが、この第8番もまさしくそうした改訂の問題が大きく関わっている。

彼がこの交響曲に着手したのは1884年夏のことだった。同年暮れには交響曲第7番の初演が彼の作品としてはかつてない成功を収めるなど、齢60を迎えてようやく彼に対する評価が高まりつつあった時期のことで、彼は意欲的に第8番の草稿を書き進め、翌85年の8月には全体のスケッチをほぼ完了させている。引き続きオーケストレーションに取り掛かり、推敲を重ねて、全曲は1887年夏に完成をみた。

ブルックナーにとって、入念に仕上げたこの大作は相当の自信作であった。9月には尊敬する指揮者ヘルマン・レーヴィ（1839～1900）に宛てて、「ハレルヤ、第8番はついに完成をみました。この報告を最初に受ける人は私の芸術上の父である貴方でなくてはなりません」と書き送っていることにも、彼の自信のほどが窺えよう。

ところが送られてきた清書スコアを見たレーヴィはこの曲を全く理解のできないものであるとして、初演の指揮を執ることを拒絶する。自分の良き理解者であると信じていたこの名指揮者から批判を受けたことでブルックナーはすっかり落ち込み、自信喪失に陥ってしまう。この頃にはすでに次の交響曲第9番の作曲にも取り掛かっていたのだが、彼はそれも中断し、代わりにいくつかの旧作の改訂に乗り出すのだ。こうして第3番の新たな改訂稿などがこの時期に作られることになる。

その間にはレーヴィから批判された第8番の改訂にも着手したが、その本格的な取り組みは1889年になってからになった。改訂作業はきわめて大がかりなもので、随所に大幅な書き換えや楽器法の改変が施されるとともに全体が切り詰められた。中でも第1楽章最後の輝かしい *fff* による終結部のカット、第2楽章のトリオの差し替え、第3楽章における調構成の変更などは、特に目立った改変点といえよう。とりわけ第1楽章の終結の改訂は全曲の劇的な流れや構成のコンセプトを大きく変えるものといっ

てよい。
楽器編成も大きく変更された。第1稿は最初の3楽章は2管編成で、終楽章のみ3管だったが、改訂稿は全曲通じて3管にされ、またホルンとワーグナーチューバの割り当ても両稿では異なっている。

こうして交響曲第8番は1890年に全く新しい形に生まれ変わった。1892年12月18日、ハンス・リヒター（1843～1916）の指揮するウィーン・フィルによって行われた初演は大成功で、ブルックナーは大いに勇気づけられたという。

近年までこの交響曲は改訂稿でのみ知られてきたが、1972年にレオポルト・ノヴァーク（1904～91）によって第1稿が全集版の一環として出版されたことで、その実体がようやく一般にも明らかにされることになった。ブルックナーのオリジナルの構想を重んじるエリアフ・インバルは1982年にいち早く第1稿をレコーディングし、その真価を世に知らしめており、以後も彼は通常第1稿で演奏してきた。本日は改訂稿での演奏で、インバルがこの稿を取り上げる稀な機会となる。

第1楽章 アレグロ・モデラート ハ短調 2分の2拍子 霧のようなトレモロ（いわゆるブルックナー開始）の中に提示される重苦しい第1主題、ブルックナー独特のリズムによった第2主題、弦のピッツィカート上にホルンと木管が応答する第3主題という3つの主題を持つソナタ形式で、峻厳な雰囲気の中に起伏に富んだ悲劇的な展開を示す。最後は激しいクライマックスを築いた後、死にゆくような弱々しい鼓動の反復のうちに閉じられる。前述のように初稿では力強い終わり方をしていた。

第2楽章 スケルツォ／アレグロ・モデラート ハ短調 4分の3拍子 野性的ともいえるダイナミックなスケルツォ楽章。ハープも加わる中間部のトリオ（遅く、変イ長調）は改訂の際に新しく差し替えられた部分で、寂しげな表情の叙情的な旋律が歌われ、スケルツォと際立った対照をなす。

第3楽章 アダージョ／荘厳に遅く、しかし引きずらないように 変ニ長調 4分の4拍子 深い思索性と瞑想性を持った長大な緩徐楽章で、動きが少なく息の長い旋律がゆったりと歌われる第1主題は、この楽章の沈思的な性格をよく示している。形式的には二重変奏の形をとり、2つの主題が交互に変奏されながら大きなクライマックスに向けて高揚するが、最後はまた深淵に沈んでいく。第1稿と改訂稿とでは後半部分がかかなり異なっている。

第4楽章 フィナーレ／荘厳に、急がずに ハ短調 2分の2拍子 堂々たる第1主題、コラル風の第2主題、歩むような伴奏上に示される第3主題で構成されるソナタ形式の壮大かつ劇的なフィナーレ。再現部の終わりで第1楽章第1主題が帰属して悲劇的な頂点を築いた後、コーダでは全楽章の主題が重ね合わされて全曲を有機的にまとめ上げ、ハ長調の明るく輝かしい高揚のうちに閉じられる。

（寺西基之）

作曲年代：第1稿／1884～87年 改訂稿／1887～90年

初 演：改訂稿／1892年12月18日 ウィーン ハンス・リヒター指揮

第1稿／1973年9月2日 ロンドン ハンス・フーバート・シェンツェラー指揮
（第1楽章のみは1954年5月2日 ミュンヘン オイゲン・ヨッフム指揮）

楽器編成：フルート3、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット3（第3はコントラファゴット持替）、ホルン8（第5～8はワーグナーチューバ持替）、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、シンバル、トライアングル、ハープ2、弦楽5部

東京都交響楽団 福岡特別公演

TMSO Special Concert in Fukuoka

TMSO

福岡シンフォニーホール(アクロス福岡)

2019年3月23日(土) 15:00開演

Sat. 23 March 2019, 15:00 at Fukuoka Symphony Hall(ACROS Fukuoka)

東京都交響楽団 名古屋特別公演

TMSO Special Concert in Nagoya

TMSO

愛知県芸術劇場コンサートホール

2019年3月24日(日) 14:00開演

Sun. 24 March 2019, 14:00 at Aichi Prefectural Arts Theater

指揮 ● エリアフ・インバル Eliahu INBAL, Conductor

チェロ ● ガブリエル・リップキン * Gavriel LIPKIND, Violoncello

コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

ブラームス: 悲劇的序曲 op.81 (13分)

Brahms: Tragische Ouvertüre, op.81

チャイコフスキー: ロココ風の主題による変奏曲 op.33 * (19分)

Tchaikovsky: Variations on a Rococo Theme, op.33

休憩 / Intermission (20分)

ショスタコーヴィチ: 交響曲第5番 二短調 op.47 (46分)

Shostakovich: Symphony No.5 in D minor, op.47

I Moderato

II Allegretto

III Largo

IV Allegro non troppo

主催 (3/23) : 公益財団法人東京都交響楽団

公益財団法人アクロス福岡



アクロス福岡

ACROS FUKUOKA

西日本新聞社 ● 西日本新聞社

主催 (3/24) : 公益財団法人東京都交響楽団

協力 (3/24) : 公益財団法人名古屋フィルハーモニー交響楽団 ● 名フィル

クラシック名古屋

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。



第874回 定期演奏会Aシリーズ

Subscription Concert No.874 A Series

東京文化会館

2019年3月26日(火) 19:00開演

Tue. 26 March 2019, 19:00 at Tokyo Bunka Kaikan

指揮 ● エリアフ・インバル Elisha INBAL, Conductor

チェロ ● ガブリエル・リップキン * Gavriel LIPKIND, Violoncello

コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

ブラームス: 悲劇的序曲 op.81 (13分)

Brahms: Tragische Ouvertüre, op.81

ブロッホ: ヘブライ狂詩曲《シェロモ》* (23分)

Bloch: Schelomo, Hebraic Rhapsody

休憩 / Intermission (20分)

ショスタコーヴィチ: 交響曲第5番 二短調 op.47 (46分)

Shostakovich: Symphony No.5 in D minor, op.47

I Moderato

II Allegretto

III Largo

IV Allegro non troppo

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：イスラエル大使館、東京都、東京都教育委員会

助成：



文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)

文化庁

独立行政法人日本芸術文化振興会



イスラエル大使館

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

Gavriel LIPKIND

Violoncello

ガブリエル・リップキン

チェロ



因習を打ち破るチェリストと称され、その表現豊かな音楽性で世界の注目を集めている。1977年イスラエル生まれ。フランクフルト音楽大学、カールスルーエ音楽大学、ニューイングランド音楽院などで学ぶ。1997年レナード・ローズ国際チェロ・コンクール2位（1位なし）、1998年ミュンヘン国際音楽コンクール入賞。

これまでにメータ、シノーポリ、ゲルギエフらの指揮で、イスラエル・フィル、ミュンヘン・フィル、マリンスキー劇場管などと共演。室内楽ではリップキン・カルテットとして活動、またズッカーマン、バシュメット、クレーメルらと共演。CDはリップキン・プロダクションから「チェロ・ヒロイックス」と題したシリーズ（自身による独奏パートの校訂譜付き）でシューマンやショスタコーヴィチ、サン＝サーンスなどのチェロ協奏曲をリリース、高い評価を受けた。レパートリーは委嘱作品から自身のアレンジまで幅広く、多岐にわたる活動を展開している。

Gavriel Lipkind is often referred to by the press as an "Iconoclastic Thinker". He was born in 1977 in Israel. Having graduated from three major academies on three continents and having won more than a dozen top prizes in major competitions, Lipkind found himself at the pinnacle of his youthful achievements. He has performed with orchestras such as Israel Philharmonic, Münchner Philharmoniker, and Mariinsky Theatre Orchestra under batons of Mehta, Sinopoli, and Gergiev. Besides the well known masterworks, Lipkind's repertoire encompasses numerous rarities, newly commissioned works, own arrangements, and a daring approach to chamber music.

ブラームス： 悲劇的序曲 op.81

「2つの序曲を書きました。ひとつは笑って、もうひとつは泣いています」と、ヨハネス・ブラームス（1833～97）が友人宛の手紙に記したのは1880年9月のことだった。“笑っている”のは《大学祝典序曲》、そして“泣いている”のは、本日のプログラムを飾る《悲劇的序曲》。

前年に名誉博士号をブレスラウ大学から授与されたブラームスが、その返礼として筆をとった《大学祝典序曲》は、ドイツの学生歌をメドレー風に仕立てたもので、陽気で快活な調子が一貫する。まるで正反対に響く“姉妹作”を、彼は同じ1880年の夏に避暑地バート・イシュルで完成させたわけだ。別の手紙の中では「悲劇的な序曲にも手を染めずにはられませんでした」という言葉を発しており、それが創作を支える内面的衝動のバランスをとるための行為だとすれば非常に興味深い。かのルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が、交響曲第5番《運命》と第6番《田園》の作曲を並行して進めた事実に通じるものがある。

ブラームスの友人マックス・カルベック（1850～1921）が残した評伝では、ウィーンのブルク劇場から打診を受けたものの実現に至らなかった、ゲーテの『ファウスト』上演用の劇音楽に対して抱いた着想が、この《悲劇的序曲》と、3年後に完成をみた交響曲第3番（第2・第3楽章）へ転用されたとしている。しかしその証左となる言辭は存在せず、ブラームス自身も「特定の劇的な題材を踏まえたものではない」と述べている。

曲はソナタ形式に沿って書かれ、テンポ指定は“アレグロ・ノン・トロポ”。和音連打に続いて提示される第1主題は緊張度の強い弧を描き、シンコーペーションのリズムを従えて動機群の明滅する副主題部が揺れ動く内心の情を伝え、歌心に満ちた第2主題にも次第に激昂調のリズミカルな楽句が忍び寄る。展開部の後半は“モルト・ピウ・モデラート”となり（倍の速度に歩調を落とす）、ここで第1主題の変形された再現が行われる。再びテンポを戻して副主題以降が型通りに回帰を遂げた後に、反抗心と諦観の交錯するコーダが続く。

“運命との闘争”というベートーヴェン的なテーマへの解答が、ブラームス流に凝縮度も高く与えられた作品だ。

（木幡一誠）

作曲年代：1880年夏

初演：1880年12月26日 ハンス・リヒター指揮 ウィーン・フィル

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦楽5部

チャイコフスキー：

ロココ風の主題による変奏曲 op.33 (3/23福岡、3/24名古屋)

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）は1866年から78年までモスクワ音楽院で教鞭をとった。ここでの同僚のひとりにドイツから教えに来ていた名チェロ奏者ヴィルヘルム・フィッツェンハーゲン（1848～90）がいた。チェロ独奏と管弦楽のための《ロココ風の主題による変奏曲》はこのドイツ人チェリストのために書かれた協奏作品で、1876年末から77年初めにかけて作曲された。当然ながらフィッツェンハーゲンに助言を求めながら書き進められたと思われ、初演は1877年11月にフィッツェンハーゲンの独奏、ニコライ・ルビンシテインの指揮でなされた。

しかしながらフィッツェンハーゲンは演奏家としての視点から曲をより演奏効果の高いものとするべくチャイコフスキーの承認のないままに改訂を施し、変奏の順番も変更、さらに原曲の第8変奏を削除し、その形でピアノ・スコアを1878年に出版してしまう。彼はこの自らの改訂版で各地でこの曲を演奏し、それが好評を得たために、管弦楽用の総譜も結局この形で1889年に出されることになった。

チャイコフスキーにとってこのフィッツェンハーゲンによる改訂版は全く不本意なものだったのだが、以後この曲はこの改訂版で広まり、作曲家オリジナルによる版も1956年に出されたものの、原典重視の今日に至ってもいまだフィッツェンハーゲン版での演奏が主流（本日もこの版が用いられる）となっている。

曲は、“ロココ風”（かどうかは意見が分かれよう）の優美な主題をもとに、古典的な2管編成のオーケストラをバックとしたチェロ独奏が、そのカンタービレと技巧とを効果的に生かした変奏を繰り返す。

本日取り上げられるフィッツェンハーゲン版では

序奏	モデラート・クアジ・アンダンテ
主題	モデラート・センプリーチェ
第1変奏	テンポ・デッラ・テマ
第2変奏	テンポ・デッラ・テマ
第3変奏	アンダンテ・ソステヌート
第4変奏	アンダンテ・グラツィオーソ
第5変奏	アレグロ・モデラート
第6変奏	アンダンテ
第7変奏	アレグロ・ヴィーヴォ

という構成になっているが、チャイコフスキーのオリジナルは（フィッツェンハーゲン版の番号でいうと）第1、2、6、7、4、5、3の順で並べられており、さらに最後にもう一つの変奏（アレグロ・モデラート、コン・アニマ）が置かれている。

（寺西基之）

作曲年代：1876～77年

初演：1877年11月30日（ロシア旧暦18日）（異説あり）モスクワ
ヴィルヘルム・フィッツェンハーゲン独奏 ニコライ・ルビンシテイン指揮

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、弦楽5部、独奏チェロ

ブロッホ：

ヘブライ狂詩曲《シェロモ》（3/26 A定期）

エルネスト・ブロッホ（1880～1959）は、ユダヤ人の両親のもと、スイスのジュネーブに生まれた。ヨーロッパ各地で活躍したあと、1916年からは米国で作曲と教育に携わり、オレゴン州ポートランドで亡くなった。内容的にも音楽的にもユダヤ色の濃い代表作《シェロモ》は欧州時代最後の作品で、シェロモとはソロモン王のヘブライ語形だ。

ソロモン王はイスラエル王国第3代の王（在位／紀元前971～931年頃）。名君として知られ、王国は彼の治世下で黄金時代を迎えた。「ソロモン王」といえば、現在でも賢君あるいは栄耀栄華の代名詞となっている。しかし晩年は富におぼれ、ユダヤ教以外の宗教を黙認したため、彼の死後、王国は分裂した。

曲は続けて演奏されるが、序奏と3つの部分に分けられる（以下「序奏」「第1部」などは筆者による便宜的なもので、スコアには明記されていない）。作曲者によると、チェロはソロモン王の声であり、管弦楽は彼の時代、世界、彼の経験の声を表しているが、ソロモン王自身の思いを反映することもあるという。

序奏 レント・モデラート（自由に、カデンツァ風に） シンプルな伴奏を背景に、独奏チェロが主要モチーフを提示。まず4音下降を繰り返す悲哀に満ちた旋律（A）、次にシチリアーノ風のリズムによる旋律（B）が現れ、急速な下降のあと、コントラバス（ピツィカート）とハープのD（ニ）音を合図に、「カデンツァ」と記された部分（C）となる。これらは、全曲を通じて何度も再登場する。

第1部 アンダンテ・モデラート 弱音器付きのヴィオラが先導、ハープやチェレスタなどで飾られたけだるい舞曲が始まる。これは、ソロモン王を物思いから引き離そうとする女たちを表す。ソロモン王も加わるが、次第に高揚し、ついにオーケストラも（A）の主題を ff で歌う。静かになり（C）となる。

第2部 アレグロ・モデラート 弱音器付きのヴィオラを背景に、まずファゴット、続いてオーボエが、せわしない同音反復を特徴とする朗唱風の主題を吹く。これは作曲者の父がいつもヘブライ語で歌っていた旋律だという。この旋律が力を増していくと、その頂点で（C）が、今回はオーケストラで鳴る。

第3部 アンダンテ・モデラート 第2部の同音反復主題をティンパニが静かに奏する中、チェロの悲しげなモノローグが始まる。それに続き、ヴァイオリンがピアノシモで歌う清澄な主題は、わずかな希望を感じさせる。しかしやがてソロモン王の悲観的な思いが戻ってくる。最後はチェロ独奏の（C）で静かに全曲を閉じる。

（増田良介）

作曲年代：1916年1～2月

初 演：1917年5月3日 ニューヨーク

ハンス・キンドラー独奏 アルトウール・ボダンツキー指揮

楽器編成：フルート3（第3はピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、タムタム、タンブリン、ハープ2、チェレスタ、弦楽5部、独奏チェロ

ショスタコーヴィチ： 交響曲第5番 二短調 op.47

ドミトリー・ショスタコーヴィチ（1906～75）の交響曲第5番は、彼の作品の中ではもちろん、20世紀に書かれたすべての交響曲の中でも最もよく演奏される作品の一つだ。

1936年1月、ソ連共産党機関紙『プラウダ』（すなわちソ連当局）によって、ショスタコーヴィチの歌劇『ムツェンスク郡のマクベス夫人』が厳しく批判される。これによってショスタコーヴィチは、絶体絶命の危機に陥った。当時、最高指導者ヨシフ・スターリン（1878～1953）により、政治指導層はもちろん文化人も処刑／強制収容所へ送る大粛清が進行しており、文字通り生命の危険に直面したのである。

ショスタコーヴィチは、初演の準備がかなり進んでいた交響曲第4番を撤回する。そして新しく作曲したのがこの交響曲第5番だった。ベートーヴェン風の「苦悩から歓喜へ」という明快な構成をもち、輝かしい二長調のフィナーレで終わるこの曲の初演は大成功を収め、ショスタコーヴィチはこれにより、事実上の名誉回復を果たした。

なお、初演を指揮したエフゲニー・ムラヴィンスキー（1903～88）は、このときがショスタコーヴィチとの初めての出会いだったが、彼らはこの成功をきっかけに親交を結ぶ。以後、作曲者は彼を非常に信頼し、多くの作品の初演を任せた。

さて、作曲者の存命中は、社会主義の闘争と勝利を描いていると何となく思われていたこの曲だが、1980年代以降、実は重層的な意味のある作品だという考え方が広がる。現在も、ピゼーの歌劇『カルメン』や、自作の歌曲「復活」の引用などを手がかりに、この曲の隠された意味を探ろうとする議論は絶えない。特に、作曲者がこの曲にスターリンに対する批判を込めたという考え方には支持者が多い。それは自然な考え方ではあるものの、その通りだと断定できるほどの手がかりはまだ出ていない。

スターリンの死後に発表された交響曲第10番において、第2楽章は「スターリンの肖像」だとする説が一時期広まったが、実は思いをかけていた女性の名前が織り込まれていた（第3楽章）ことが書簡から判明した例もある。ショス

タコーヴィチの音楽は一筋縄ではいかないのだ。

第1楽章 モデラート 自由なソナタ形式。主要主題は、弦合奏による重々しいカノンの序奏主題、第1ヴァイオリンの下降で始まる静かな第1主題、ビゼーの『カルメン』「ハバネラ」を思わせる第2主題（第1ヴァイオリンが提示）の3つ。提示部には他にもいくつかの主題が現れていて、展開部以降ではそれぞれに役割を果たす。

ピアノが登場し、ホルンが粗暴な行進曲のように第1主題を吹く箇所からが展開部だ。展開部では提示部の主題群を用いた暴力的なクライマックスが築かれる。再現部は、まず序奏主題が低音に反行形で現れ、次に第2主題によるカノン（フルートとホルン）となる。

第2楽章 アレグレット 3部形式のスケルツォ。交響曲第4番のスケルツォ楽章と同様、主部は、マーラー風の苦くグロテスクなユーモアが感じられる。ヴァイオリン独奏が活躍する中間部のあと、主部が戻ってくるときには主題がピツィカートになっている。

第3楽章 ラルゴ 悲痛な雰囲気支配する緩徐楽章。複数の主題による変奏曲と見ることができるが、心細げに提示された主題が次に出てくるときには威圧的だったり、あるいはその逆だったり、さまざまな工夫がこらされている。金管楽器はまったく使わず、弦は、ヴァイオリンを3群、ヴィオラとチェロを各2群に分割し、繊細な響きを作り出している。ハープやチェレスタの使い方も効果的だ。

第4楽章 アレグロ・ノン・トロppo 自由な形式のフィナーレ。急-緩-急の3部分に分かれる。まず、ティンパニが4度音程を打ち鳴らし、トランペットとトロンボーンが行進曲風の力強い主題を吹く。これが次第にテンポを上げながら頂点に達すると、突然失速し、静かでゆっくりとした第2部に入る。しばらく物思いにふけるような音楽が続くが、やがて再び静かに行進曲のリズムが始まり、冒頭の主題が復帰すると第3部となる。ほぼ短調で進んでいくが、最後の最後で二長調となり、少なくとも表面上は輝かしい終結に至る。

なお、楽章冒頭の「ラレミファ」という音型と、第2部の最後に出てくるハープの音型は、この曲と同時期に書かれた《プーシキンの詩による4つのロマンス》op.46に含まれる歌曲「復活」の引用とされる。「野蛮人が画家の絵をでたらめに塗りつぶすが、やがてそれは剥がれ、もとの美が姿を現すだろう」というこの歌曲の内容は、作曲者の受けた批判に対する抗議と見なすこともできる。

(増田良介)

作曲年代：1937年4月18日~7月20日

初演：1937年11月21日 レニングラード

エフゲニー・ムラヴィンスキー指揮 レニングラード・フィル

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、小クラリネット、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、タムタム、グロッケンシュピール、シロフォン、ハープ2、ピアノ（チェレスタ持替）、弦楽5部



第875回 定期演奏会Cシリーズ

Subscription Concert No.875 C Series

Series

東京芸術劇場コンサートホール

2019年3月31日(日) 14:00開演

Sun. 31 March 2019, 14:00 at Tokyo Metropolitan Theatre

指揮 ● エリアフ・インバル Eliahu INBAL, Conductor

ピアノ ● サリーム・アシュカール Saleem ASHKAR, Piano

コンサートマスター ● 四方恭子 SHIKATA Kyoko, Concertmaster

ベートーヴェン: ピアノ協奏曲第1番 ハ長調 op.15 (36分)

Beethoven: Piano Concerto No.1 in C major, op.15

I Allegro con brio

II Largo

III Rondo: Allegro scherzando

休憩 / Intermission (20分)

チャイコフスキー: 交響曲第5番 ホ短調 op.64 (48分)

Tchaikovsky: Symphony No.5 in E minor, op.64

I Andante - Allegro con anima

II Andante cantabile con alcuna licenza

III Valse: Allegro moderato

IV Finale: Andante maestoso - Allegro vivace

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：イスラエル大使館、東京都、東京都教育委員会

助成：文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)



独立行政法人日本芸術文化振興会



イスラエル大使館

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

ヤングシート対象公演 (青少年を年間500名ご招待) 協賛企業・団体はP.51、募集はP.54をご覧ください。



Saleem ASHKAR

Piano

サリーム・アシュカール

ピアノ



22歳でカーネギーホールヘデビュー。これまでにメータ、バレンボイム、ムーティ、シャイー、ルイーゼ、ジョルダン、フルシャ、エツェンバツハらの指揮で、ウィーン・フィル、ロイヤル・コンサートヘボウ管、シカゴ響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、NDRエルプフィル、ベルリン・ドイツ響、ミラノ・スカラ座フィル、サンタ・チェチーリア国立アカデミー管、ロンドン響、イスラエル・フィル、マリンスキー劇場管などと共演。ザルツブルク音楽祭、ルツェルン音楽祭、BBCプロムス、ラヴィニア音楽祭などへ登場。近年はベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏会を各地で展開しており、ベルリン・コンツェルトハウス、プラハ、そして母国イスラエルで開催した。

Saleem Ashkar made his Carnegie Hall debut at the age of 22 and has since gone on to work with Wiener Philharmoniker, Royal Concertgebouw Orchestra, Chicago Symphony, Leipzig Gewandhausorchester and NDR Elbphilharmonie with conductors such as Mehta, Barenboim, Muti, Hrůša, and Chailly with whom he has recorded and appeared at the Proms and Lucerne Festivals. A dedicated recitalist and chamber musician, Saleem has focused on a complete Beethoven Sonata Cycle which he recently completed at Konzerthaus Berlin, in Prague and his home country of Israel.

ベートーヴェン： ピアノ協奏曲第1番 ハ長調 op.15

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が若い時分に故郷のボンを離れ、ウィーンに移ったことはよく知られているだろう。それは1792年11月のこと。モーツァルトが世を去って約1年後、ベートーヴェン21歳の時だった。彼はウィーンで、当初、作曲家としてよりもむしろピアノの名手として認知されていたから、1795年3月29日、この地で初の公開演奏会に登場した際、ピアノ作品を携え、その独奏者としてお目見えしたのも当然の成り行きであった。

これから聴くハ長調のピアノ協奏曲は、この日のために書かれたもの。ベートーヴェンとしても賭するところが大きかったのか、直前まで作曲を続け、最終楽章にいたっては公演の2日前に書かれたという。友人フランツ・ゲルハルト・ヴェーゲラー（1765～1848）は、次のように述懐している。「私も微力ながら、できる限り彼を助けた。別室では4人の写譜師がいて、ベートーヴェンは楽譜を1枚書き上げるごとに、彼らにそれを渡すのだった」

ピアニストか作曲家か。この頃のベートーヴェンは、その両方であると自覚していただろう。こんにち第1番とされているこの協奏曲と、第2番とされている変ロ長調のピアノ協奏曲（実際は後者の方が2年ほど早く完成している）を、彼は演奏旅行にもってこの作品とみなしていたようで、第1番ハ長調のほうはウィーンに続き、ベルリン、プレスブルク（現ブラチスラヴァ）、プラハ、ブダペスト（推定）で自ら弾いた。そして、そこから大いに名声と財を得たのだった。しかし、そうした旅するコンポーザー・ピアニストの生活も、長くは続かなかった。聴覚障害がすでに進行していたのである。

その後ベートーヴェンは、この第1番ハ長調のピアノ協奏曲を「最良の作品ではない」と呼ぶようになる。とはいえ、交響曲第1番が初演された1800年4月2日の演奏会で、予定されていた「ピアノ大協奏曲」（＝第3番ハ短調、この時点で未完）の代わりに弾いたのはこの曲であったし、その際、本格的な改訂も施している。愛着のほどが窺えよう。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ ハ長調 4分の4拍子 まずは管弦楽のみによる長い主題呈示から。冒頭は、いかにも開始ファンファーレの音形だが、それが弦楽器のみで、しかも弱音で奏される。ピアノが入ると、主題をなぞるのではなく、その周りを装飾するのが独創的。カデンツァには、ベートーヴェン作のものが3つある（うち1つは未完）。

第2楽章 ラルゴ 変イ長調 2分の2拍子 第1楽章のハ長調に続き変イ長調となり、異世界へ移行。当時はまだソロイスティックに扱われることが稀だった楽器、クラリネットとの絡みが、夢幻的。

第3楽章 ロンド／アレグロ・スケルツァンド ハ長調 4分の2拍子 リフレイン
(繰り返し句)に挟まれたクプレ(挿入句)は、ジャズをも思わすおどけた素ぶり
が特徴。木管楽器との積極的な対話は、モーツァルトの後期ピアノ協奏曲を思わせる。
(船木篤也)

作曲年代：第1稿／1793～95年 最終稿／1800年

初演：1795年3月29日 ウィーン 作曲家独奏

楽器編成：フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、
弦楽5部、独奏ピアノ

チャイコフスキー： 交響曲第5番 ホ短調 op.64

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840～93)がこの交響曲第5番
を作曲したのは1888年のことである。中期の1877年に交響曲第4番を完成し
てから10年以上もたってからだった。その間には、管弦楽のための4つの組曲
や《弦楽のためのセレナード》といった比較的軽いスタイルによる作品や、演
奏会用の序曲《1812年》および標題交響曲である大作《マンフレッド》など
が書かれており、そうした様々な試みを経験した後、それらで培った書法も生
かしながら改めて本格的な交響曲に挑戦したといえるだろう。

実際この第5番は、まさに後期のチャイコフスキーの作風の深まりを示す傑
作となった。着手は1888年6月初めころであるが、この年の初めにチャイコ
フスキーは指揮者としてヨーロッパ各地を演奏旅行して自作を紹介し、グリー
グ、ブラームス、グノー、ドヴォルザークらと会うなど、世界的な作曲家とし
ての地位を確固たるものとしていた。こうして得た自信とともに、帰国後、ク
リン市(モスクワ北西85キロ)近郊の村フロロフスコエに居を構えて心機一転
したことも相まって、チャイコフスキーは意欲的に新しい交響曲の創作に取り
かかる。こうして交響曲第5番は、大作であるにもかかわらず3ヵ月間とい
う短い期間で書き上げられた。彼の創作力がいかに高まっていたかが窺われ
よう。

この作品は、運命を象徴する循環主題による全曲の統一と、闘争を経て勝利
へというロマン派好みの構図を土台に、自伝的な内容を民族的表現と伝統的な
交響曲様式とに融合させている点で、明らかに前作の第4番のスタイルを受け
継いでいる。しかし第4番の時はパトロンのナジェジダ・フォン・メック夫人
(1831～94)宛の手紙でそうした標題的な表現内容を明確にしているのに対し
て、第5番では示唆的な言葉をいくつか残しているだけで、はっきりとわかる
形での手掛かりは残していない。しかし作品全体の構成も循環主題の扱いもき
わめて明確であり、チャイコフスキーは純粹に音だけによって作品そのものに

劇的な内容を語らせようとしたといえるだろう。

もっとも彼自身は当初は作品の出来栄えに不満を感じていたようで、1888年12月のメック夫人宛の手紙では失敗作とすら書いている。しかし国外を含めて各地で高く聴衆から評価されたこともあって、この交響曲に自信を持つようになった。もっともその後も再び否定的な見解を述べるなど、この傑作に対する作曲家自身の評価がかなり揺れ動いているのは興味深い。

第1楽章 アンダンテ～アレグロ・コン・アニマ ホ短調 まず序奏（4分の4拍子）の冒頭で、クラリネットによる陰鬱な旋律が示される。チャイコフスキー自身「運命、もしくは神の摂理に対する完全な服従」と述べているように、この旋律は“運命”を象徴する循環主題で、全ての楽章において様々な形で現れる。主部は8分の6拍子、ソナタ形式。3つの主題に基づいて闘争的かつドラマティックに展開する。

第2楽章 アンダンテ・カンタービレ、コン・アルクーナ・リチェンツァ（やや気ままな）ニ長調 8分の12拍子 情感に満ちた3部形式の緩徐楽章。主部はホルンによるノスタルジックな主題とオーボエの憧憬に満ちた副主題を持っている。モデラート・コン・アニマの中間部ではやや動きが加わり、やがて運命の循環主題が立ちはだかるように現れる。この主題は楽章の最後にも、憧憬的な気分を脅かすように突如として威圧的に出現する。

第3楽章 ヴァルス／アレグロ・モデラート イ長調 4分の3拍子 優美な性格のワルツ。小ぜわしい動きの中間部が対照を生み出す。その後にワルツが再帰するが、最後に、現実の闘いがまだ終わっていないとささやくかのように、そっと循環主題の変形が立ち現れる。

第4楽章 フィナーレ／アンダンテ・マエストーゾ～アレグロ・ヴィヴァーチェ まず序奏（ホ長調、4分の4拍子）において循環主題が長調で重々しく奏された後、ソナタ形式の劇的な主部（ホ短調、2分の2拍子）となって、運命との闘いが繰り広げられていく。そしてコーダ（モデラート・アッサイ・エ・モルト・マエストーゾ）に入って運命主題が明るいホ長調で朗々と示されて闘いの勝利を謳い上げ、最後は第1楽章第1主題も長調に転じて輝かしく現れ、全曲を圧倒的な高揚感のうちに締めくくる。

（寺西基之）

作曲年代：1888年

初 演：1888年11月17日（ロシア旧暦11月5日） サンクトペテルブルク 作曲家指揮

楽器編成：フルート3（第3はピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦楽5部